

# 縄文時代中期の集落と 廃棄について

南関東の中期前半～後半を中心に

Colonies and Disposal in the Middle Jomon Period :  
Mainly in the First Half to the Second Half of the Middle Jomon Period  
in South Kanto

## 中山真治

NAKAYAMA Shinji

はじめに

① 縄文時代中期前半の竪穴と廃棄

② 中期初頭から中期前半初頭の廃棄

③ 中期前半新道期(6期)から藤内Ⅱ期(8期)の廃棄<sup>(1)</sup>

④ 中期中葉(井戸尻期)から中期後半の廃棄

⑤ 「吹上パターン」と呼称されてきた廃棄の土器組成について

⑥ まとめ

おわりに

### 【論文要旨】

南関東の縄文時代中期の廃絶竪穴には土器をはじめ多量の遺物が遺棄されている。日常生活で生じる生活残滓の処理に廃絶した竪穴を好んで廃棄場所として有効に利用していた。縄文時代中期の廃棄について、主として東京多摩地域の中期遺跡での土器の接合関係から読み取れる遺物の廃棄について時期的な特徴と変遷を捉えた。

中期初頭では斜面廃棄が主体的に行われるが、廃棄場所は集落中央の空地「広場」を挟んで対向する2か所に設置された。中期前半以降は竪穴の構築が増加するにつれは廃絶した竪穴の凹地への廃棄が活発になる。中期前半では住居と集落中央「広場」を挟んだ距離を隔てた反対側の廃絶竪穴などに意識的に廃棄されることがある。その際1個体の土器を意識的に分割して投棄することも行われた。中期中葉では遺構外の廃棄場いわゆる「土器捨て場」が設けられた集落が登場する。中期中葉から後半では比較的居住場所から至近の位置にある廃絶竪穴の凹地に廃棄されることが多いが、炉体、埋甕など土器の転用加工などとも関連すると考えた。

いわゆる「吹上パターン」と呼ばれてきた半完形土器が纏まった遺存状況については、とくに中期前半ではいずれの竪穴でも15～20点ほどの類似した土器のタイプ(器種)構成となっており、これが当時の一単位のセットとしてこの土器の一括性(同時廃棄)を保証しているものと考えた。ただし廃絶竪穴に遺存する個体は半完形のみではなく多量の破片、石器、礫などを含むため本来は日常の廃棄場として機能していたと考えた。

【キーワード】 廃棄, 廃絶竪穴, 接合, 吹上パターン

## はじめに

縄文時代中期の集落遺跡の発掘調査では、廃絶した竪穴住居址に土器をはじめ驚くほど多量の遺物が廃棄されている状況に遭遇することがある。遺跡のなかでは、いわゆる遺物包含層や集落地外縁に廃棄できる広い空間が確保できるにも関わらず、大半の遺物は先住者の残した廃絶竪穴から出土するのが通例である。なかでも半完形土器や多量の土器片が纏まって出土する状態はこの時代の廃棄状況を特徴付け、学史上とくに注意され、1970年代には調査の際には「吹上パターン」と称されてきたという経緯もある。多量の土器やその他の遺物が残された状況は、いったい当時のどのような生活形態を反映したものなのか興味をそそられる。

本稿では、具体的に縄文時代中期前半～後半の多摩地域を中心とした南関東の集落遺跡での遺物廃棄の事例を取り上げて検討したい。この地域では縄文時代の集落遺跡の遺物の分布図(ドットマップ)、接合図などを作成している調査が多く、遺物出土状況が比較的によく記録されている。

### ①……………縄文時代中期の竪穴と廃棄

縄文時代の廃絶竪穴に残された大半の遺物は、遺存状態＝状況証拠からみて当時その場所に居住した人々が生活に際して発生した廃棄物(生活残滓)であろうことはほぼまちがいない。多時期にわたって(重層的)居住された集落遺跡では当然それに比例して残された遺物の総量も多い。南関東の縄文時代中期では居住されなくなって廃絶した竪穴住居址の床面上など直接その住居址の居住の最終局面に関わる痕跡は、炉対土器や埋甕など遺構に付帯する土器などしか確認できないのが通例である。また注意されるのは炉体土器など住居構築～廃絶までの時期と、廃棄された土器などの遺物の「型式差はない」ことが確認されることから、住居が住まうのを止め廃絶されてから遺物が廃棄されるまでの時間はより短いということは想像されるのである。いいかえれば、居住を停止して間もない埋没が進行していない竪穴の凹地が廃棄場所としては最適な故に好んで廃棄が行われたといえるのである。廃棄は覆土と呼んでいる住居包含土の埋没過程の時間的経過のなかで行われたことはこれまでの各地の遺跡の調査で経験的に確認されている。従って廃棄を行った主体者は付近にあった他の竪穴住居に居住した住人による行為であったとみるのが至極自然である[黒尾1987など]。

### ②……………中期初頭から中期前半初頭の廃棄

南関東地方の縄文中期初頭(五領ヶ台期)の集落遺跡ではそこに残された竪穴住居址は少なく、しかも深さも総じて浅い。そのためか廃絶した竪穴より集落地外縁の斜面などに廃棄場所を形成している事例が多い。台地や斜面にかかるような丘陵尾根の端部に住居を構築し、いわゆる集落中央の空閑地「広場」を挟んで反対側斜面に廃棄場所を確保していた。しかも時間の経過で竪穴が反対側の端部に構築されると「広場」を挟んで180度反対方向に廃棄場所が設けられる。このため結果

的には台地の東西方向など対向する2箇所には廃棄場所が残された。多摩丘陵や武蔵野台地の中期初頭五領ヶ台期（4期）から中期前半勝坂1式期（貉沢期＝5期）にかけての集落遺跡ではこのような事例が普遍的にみられる。具体的には多摩丘陵の稲城市多摩ニュータウンNo.471遺跡〔小葉他1993〕、川崎市黒川遺跡群〔小葉他1994〕や武蔵野台地の三鷹市島屋敷遺跡〔下原他1997〕はまさにこのような行為の結果をよく現わしている。著名な神奈川県五領ヶ台貝塚の東貝塚と西貝塚もこのような行為の累積的な痕跡であるとみられる（第1図1～4）。中期初頭から中期前半初頭では住居址の絶対数が少ないこともあるが、廃絶住居址という廃棄に適した深い凹地が多数確保できないためにこのような「土器捨て場」〔中野1984など〕と称されてきたような斜面廃棄が行われたのだろう。

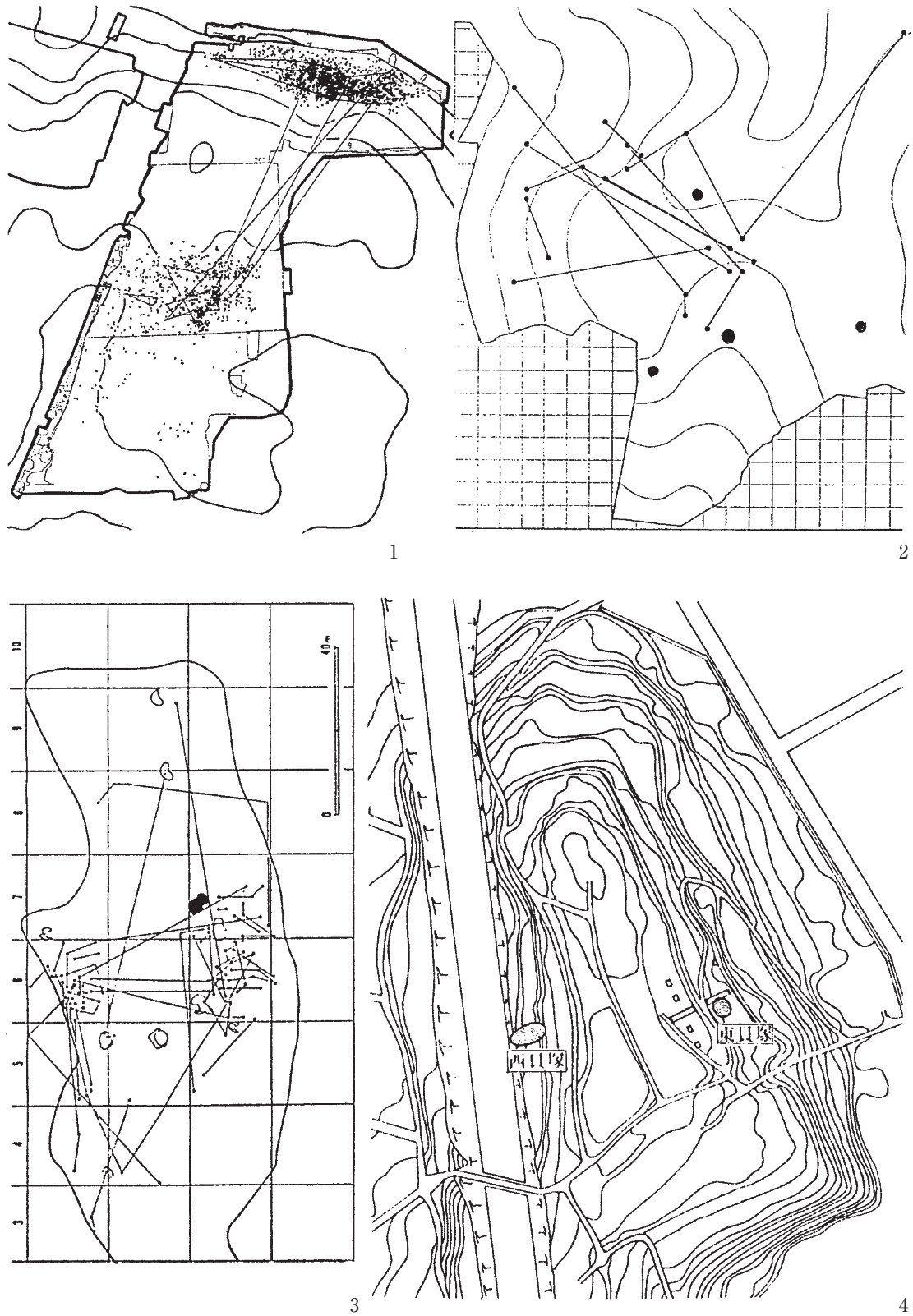
八王子市栢田第V遺跡も中期初頭集落で4軒程の住居が確認されたが、集落外縁の斜面の調査は実施されていないので廃棄場所は明確ではない〔中西他1981〕。因みに中部地方の遺跡では前期末葉から中期初頭では既に堅穴廃棄が盛行していることが確認されている。南関東より相対的に前期末葉、中期初頭に構築された堅穴数が多いためであろうか。

なお多摩地域の中期初頭の集落遺跡ではしばしば集落の中央に集石土坑が多数構築され、周辺に使用されて破損した土器が多量の焼礫とともに散在している状況もみられる（八王子市栢田遺跡群など）。当該期では堅穴内よりむしろ堅穴外の集石（土坑）が調理施設として盛んに利用されていたことを現わしている。なお武蔵野台地方面ではこの伝統が貉沢期（5期）まで残ることを確認した〔中山2007〕。

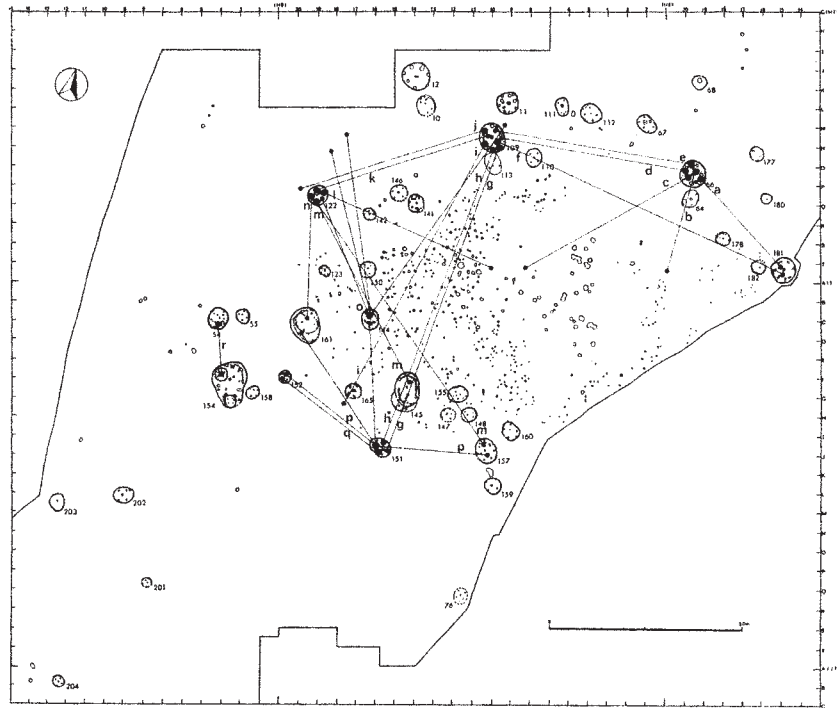
とくに南関東の五領ヶ台期に限ってみれば、中期前半以降とは異なり、「広場」空間の清掃（片付け）があまく、堅穴への廃棄が徹底していないという特徴がみられる。要はこういう集落では片付けを行わずに他に移動してしまっているのである。

### ③……………中期前半新道期(6期)から藤内Ⅱ期(8期)の廃棄

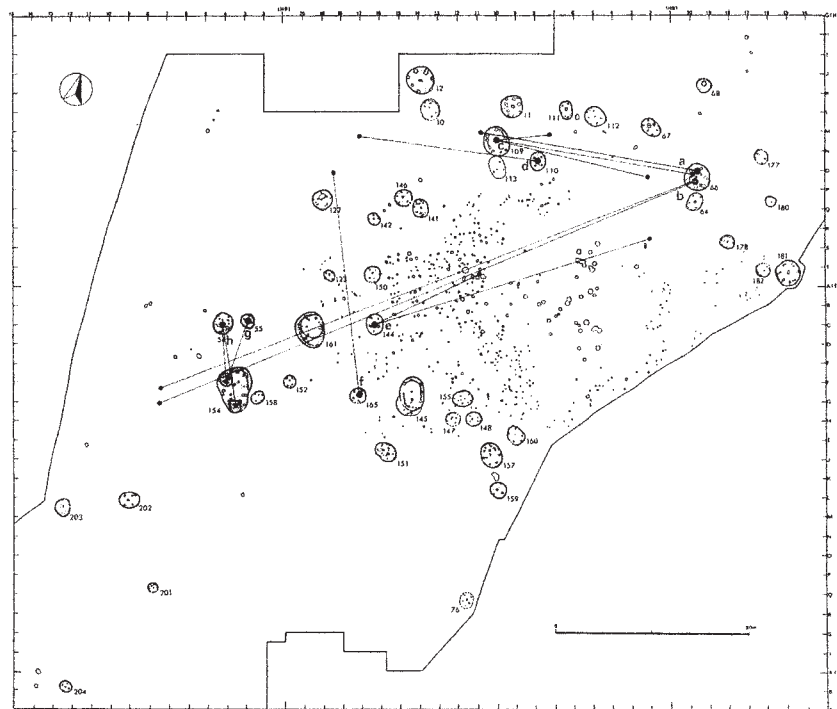
中期前半の貉沢期後半（5c期）から新道期（6期）以降では、廃絶堅穴に大型の土器片や半完形土器が残された事例が目立ってくる。八王子市神谷原遺跡はほぼ集落全体が完掘された中期初頭から前半の遺跡で50軒程の住居址などが検出された。この遺跡の報告の整理作業では遺跡全体で土器をはじめとした遺物の接合が試みられ、接合により1個体の土器や土偶が分割されて複数の廃絶堅穴に廃棄された状況をうかがい知ることができ、実際に26例が確認された（第2図）〔藤野他1982〕。ここで注意されるのは神谷原Ⅲ期（新道期）、Ⅳ期（藤内期）では1か所で纏まって出土する個体がある一方、1個体の土器が2箇所ないし数箇所にも分割されて投棄されていた事実があるということである。しかも近接しない住居址との接合関係が目立つということが注意される。このことは上述した中期初頭の場合と同様、居住場所からはある程度離れた場所にゴミ捨て場を設けるという意識が働いていたとみてよいであろう。1軒の住居跡を中心にネットワーク状ともいえるような放射状に接合線が延びる状況がうかがえる。最も離れたものでは150m以上もの距離で接合する個体もみられる。居住中の住居からなるべく廃棄物を回避したいという意識が働いていたのは確かであろう。神谷原遺跡の報告では、単純に1個体の土器が2分割されて廃棄されたのではないと



第1図 中期初頭の廃棄場 (1. 鳥屋敷遺跡, 2. 多摩ニュータウンNo.471遺跡, 3. 黒川遺跡群No.25遺跡, 4. 五領ヶ台貝塚)



1



2

第2図 神谷原遺跡の遺物接合(1. 新道期, 2. 藤内期)

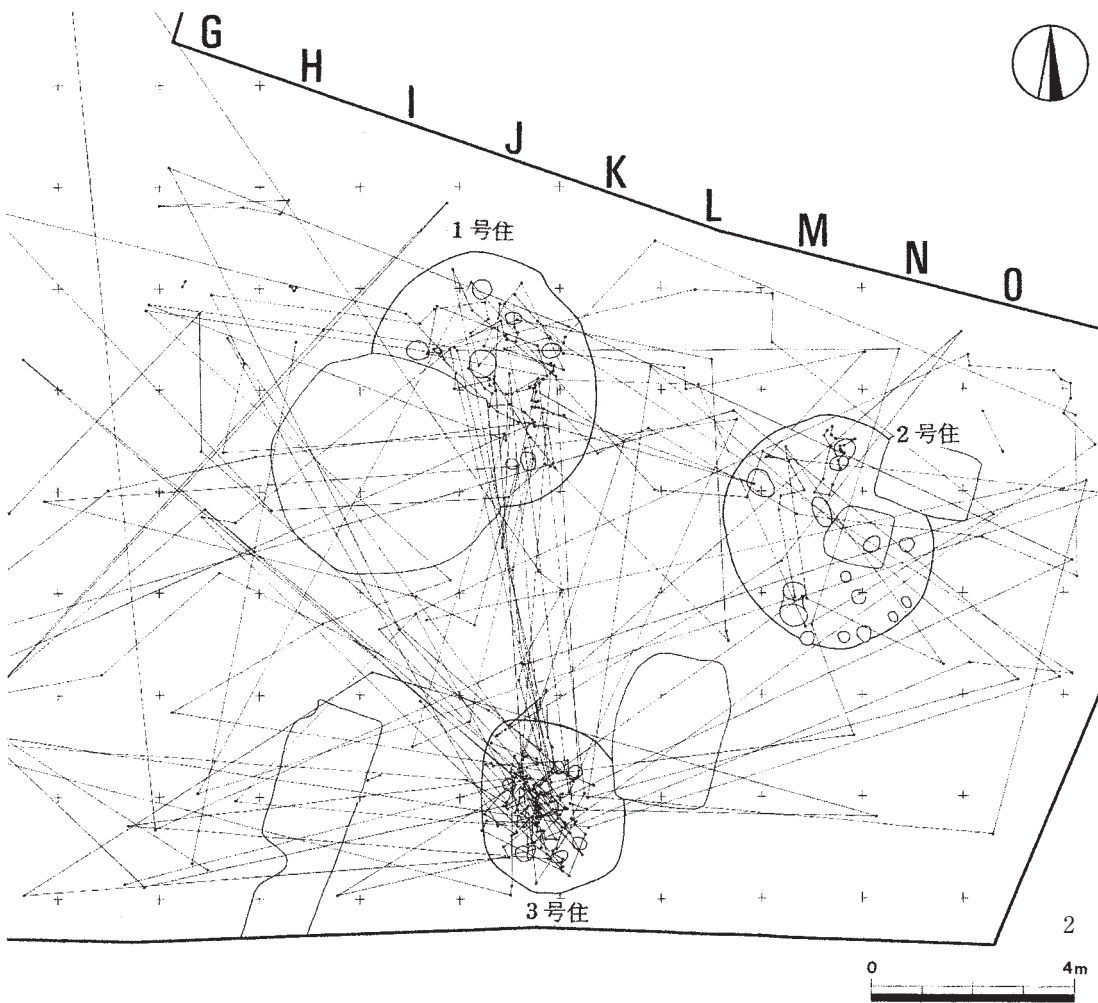
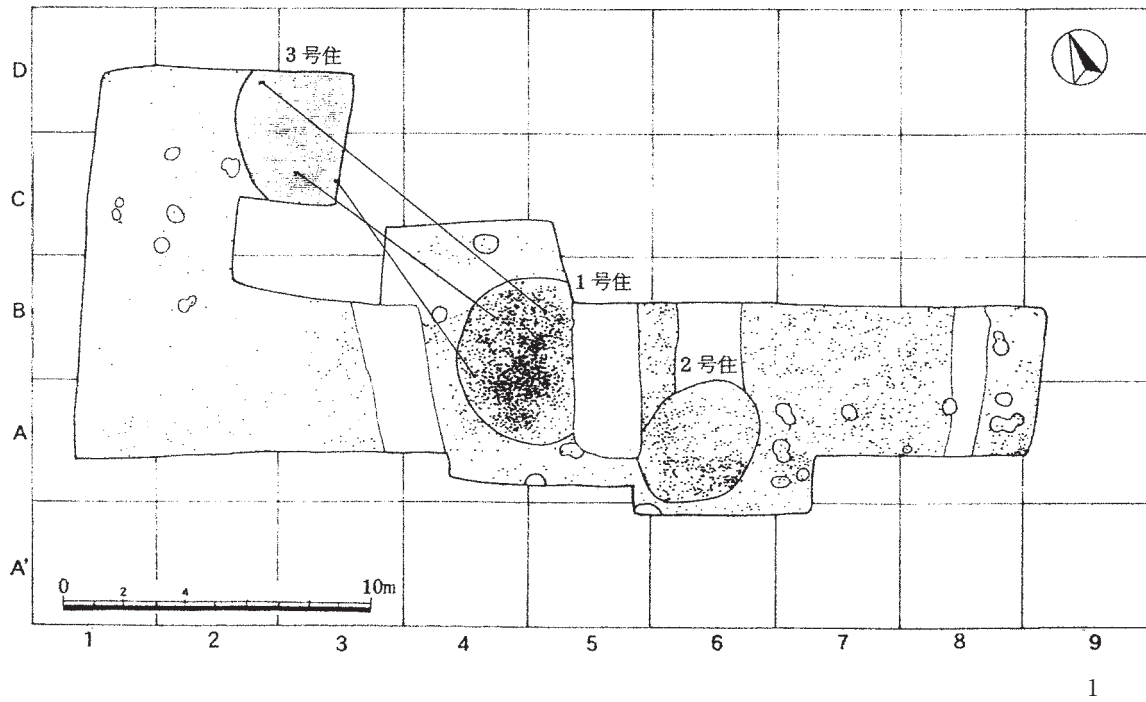
いうことにも注意が払われ、二次的な廃棄である「再廃棄」、あるいは「多次廃棄」[中野 1984]が行われた可能性も指摘されている。

廃棄場所（廃絶堅穴）が居住する住居とは「広場」を挟んでどちらかといえば反対方向に設けられていたことが、次に構築される住居の位置を決定し、わずかず構築場所がずれた結果的残された住居跡が環状を呈してくる可能性は十分に考慮されよう。見かけ上「広場」を挟んで同時期に2軒の住居が対峙するように配された集落遺跡があるが、この場合突き詰めていくと、果たして2軒が実際には同時並行で存在した確証を得られないとみてよい証拠が遺物の接合関係から揃ってきている。遺存する土器型式のみで時間的同時存在かどうかは決定しがたいことはもはや常識となっている。多くの事例ではわずかでも時間差（ズレ）があると考えたほうが間違いのないであろう。「八王子市神谷原遺跡の接合状況に現れているように、埋没のタイミングが近い住居の関係が示される－覆土間の接合は「環状集落」のなかでも比較的距離をおいた住居間に認められ、近接住居には認められないという傾向が確認できた。こういったあり方が、「環状集落」における一時的景観のおそらく最大規模を推定できる情報になると考えた」[黒尾 2004]ことは遺物分布図と接合図の作成により初めて理解できるものである。土器の接合関係で居住の同時性を知るといよりは、埋没の経過を辿ることで埋没の時間差（ズレ）を確認していくことで間接的に住居の同時性を確認していくという手法が最も有効であることが本遺跡の調査を契機にその後認識を深めていったといえよう。同時併存住居はせいぜい2～3軒という環状集落否定説である。

神谷原遺跡では居住期間が比較的短期間であることもあって、住居址どうしの重複度は低いといえるが、住居址が多重化する遺跡は中期集落遺跡では普通にみられる。中期前半の集落遺跡では同一土器型式内での同一場所での重複例はなく、同一場所に堅穴を構築する場合は少なくとも2細分型式以上の単位時間的開き（実年代で60～70年?）が存在するであろうことを確認した[中山 2007]。すなわち遺物が廃棄されつつ数十年の時間を経て、埋土により堅穴は完全に埋没（自然堆積）し、ようやく更地に戻ったものと理解できる。

神谷原遺跡の集落では最初に五領ヶ台期（4期）にぼつぼつと居住が開始されるが、貉沢期には多数堅穴が構築されるようになることから、次の新道期には既に十数軒にも及ぶ廃絶した堅穴の凹地が多数残されていたという景観が想像される。従って当然のことであるが時間の経過とともに新道期から次の藤内期には堅穴内への廃棄量が増大している。神谷原遺跡の集落は中期中葉以前には既に放棄されているが、このまま居住回数を増やし居住痕跡が累積すれば典型的な「大規模環状集落」が形成される。土地利用の頻度が増せば当然2次的、3次的に遺物が移動し、攪乱が頻発し、多時期の遺物の混在する率が高まる。長期間居住が行われた多摩ニュータウンNo.72遺跡はそういった最も典型的な集落の一つであろう。

全面発掘調査こそ行われていないものの、小金井市栗山遺跡B2地点（7a期）では3軒の住居址のうち2軒の住居址（1, 3号住居址）間で接合する状況が確認できたのでここでも土器の分割廃棄が行われていたといえそうである（第3図1）[伊藤 1996]。この事例でも少なくとも1, 3号住居跡以外の居住者（7a期, 2号住居址?）による廃棄が行われたのであろう。因みに栗山遺跡の1975の調査では、土器片の接合関係を詳細に検討した結果、より隣接する同型式期の住居址（1, 3号住居址）であっても埋没過程にはわずかな時間差が存在したことを指摘し、同一型式≠同時期



第3図 土器の住居址間接合 (1. 栗山遺跡 B2地点, 2. 御殿山遺跡第2地区 C地点)

かどうか改めて注意すべきことを喚起した。[土井他1975]。この土井らの調査は後に集落遺跡の遺構の時間的関係の復元を目指す研究の契機となった重要な調査報告である。

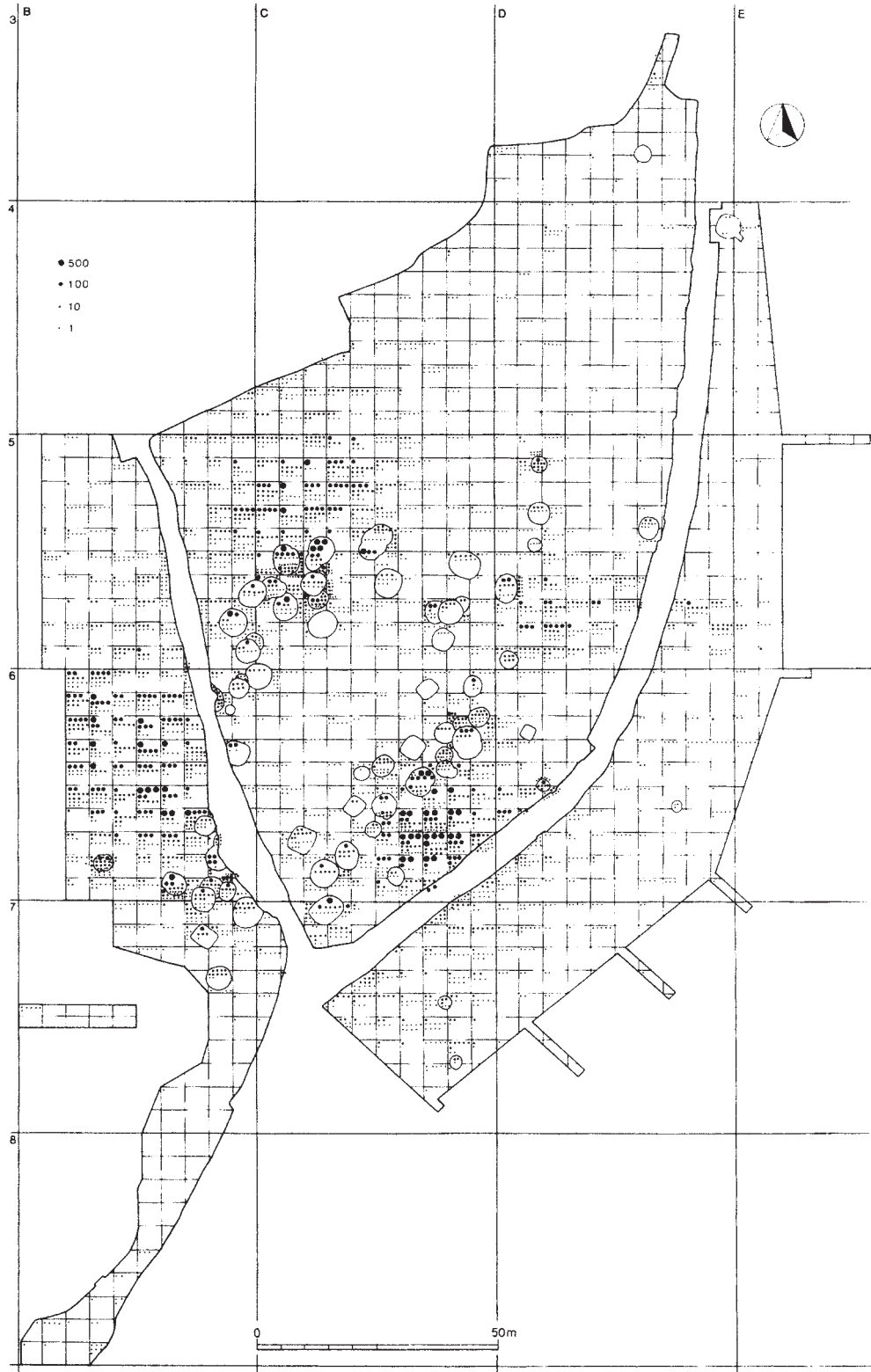
井の頭池谷頭北側付近に展開する武蔵野市御殿山遺跡（第2地区C地点）（7b～8a期）では詳細な個別別土器分布図、接合図が提示されているが、ここでも近接して存在する3軒の廃絶竪穴（1, 2, 3号住居址）に土器片が分割して廃棄されており、神谷原、栗山遺跡と近似したあり方がみえる[下原他1992]、炉体土器を残す2号住居址（8a期）は相対的に遺物の出土が希薄であるが、5m程で近接する1, 3号住居址間で接合する個体が多くみられ、とくに3号住居址では半完形個体10個体程が覆土上部に廃棄されている。1号住居址では礫が多く、2号住居址では石器の製作に関係するとみられる黒曜石製の剥片などの廃棄が目立つなど竪穴ごとに出土状態の個性を認める。1, 3号住居址ではそれ以外の居住者（発掘調査区外?）により個体を分割した上で廃棄が行われたものであろう。ただしこの遺跡では1か所で纏まる半完形個体が少ないこと、やや型式差のある個体が同一遺構内にみられるので、2次的、多次的に「再廃棄」が行われていた可能性もある（第3図2）。

練馬区中村南遺跡第2地点は中新井川右岸に展開する中期前半の集落遺跡では、住居址7軒が調査されている[宮下他2005]。当該遺跡は正式報告が刊行されていないため遺物の詳細な分布図、接合図こそ示されていないが、各々7a, 8b, 9a期の住居址が南群4軒、北群3軒が2か所に「広場的空白地帯を挟んで約50～60m程離れて対峙するように遺存している状況がみてとれる。炉体土器以外は全体に竪穴内に残された遺物は少ないが、土器型式上は同時期とみられる2～3軒の住居もわずかな時間差をもって存在した可能性がある事例である（しかも7b, 8b, 9a各時期の間には連続的居住の可能性は低く、各々大きな時間的断絶があるとみてよい）。

住居覆土間の遺物での接合以外には、炉体土器など住居にともなう土器と覆土の破片が接合した事例が知られている。接合を試みた調査としては早い時期に属する武蔵村山市吉祥山遺跡[橋口他1980]の炉体土器の接合関係はよく知られている。7号住居址の炉体土器（8b期）の口縁部付近の不要破片を数m程離れた、先に廃絶した4号住居址の凹地に廃棄、5号住居址覆土上部にも小破片が混在しているという状況であった。炉体土器の設置にあたって、すぐ近接する廃絶竪穴にも破片の廃棄が行われていたことが明らかにされた事例である。炉体土器や埋甕など住居付帯施設に使用される土器の設置過程における接合事例は、その後中期後半を中心に次々に報告事例が増加する（恋ヶ窪遺跡14号住居址、原山遺跡SI04A、三矢田遺跡J10号住居址など）。土器では最初から再利用されない不要な個体を廃棄する場合と、炉体土器などに転用される個体で作業上生じた不要破片を廃棄する場合では廃棄される場所や距離に相違がみられる。中期後半の事例が圧倒的に多いが、炉体土器などの構築の際には不要破片等を至近に投棄される傾向があるとみてよいであろう。この事実は既に黒尾和久が原山遺跡の中期後半の住居址の調査の整理作業による結果、「埋設土器と住居覆土間の接合資料は、近接住居間に見いだされる傾向があるという補完関係を確認した」と中期後半の事例であるが確信をもって指摘している[黒尾2004]。

八王子市滑坂遺跡は丘陵の小丘頂部を中心に展開した中期前半～後半の「環状集落」である。竪穴住居址80軒などが検出された。中期前半では個々の竪穴への廃棄のみではなく、南西部、南東部を中心に外縁斜面地への廃棄も積極的に行われていた形跡が認められるが、これは平坦地がない丘陵という地形的な制約によるものであろう。他の集落よりは斜面の傾斜がきついためか竪穴から





第4図 滑坂遺跡の中期(前半)の土器の分布

遺物が流出，拡散している様子もうかがえる [佐々木他 1998]。本遺跡では大きく東西に形成された廃棄場所と捉えることができるが，これは中期初頭の2か所に分割された伝統を受け継いでいる可能性もあろう。

また遺構（住居址）間接合では中期前半より後半の時期により広範囲に破片が移動していることが報告書掲載の接合図から読み取ることができる。炉体土器などに頻繁に転用される過程で破片が拡散している可能性はあろう。

なお滑坂遺跡の集落では，最終的に遺物の総体的分布は径100～120m程の馬蹄形を呈し，結果的には海浜部の馬蹄形（環状）貝塚の貝層の広がりとはほぼ同規模の廃棄遺物の分布となっているのが注意される（第4図）。

#### ④……………中期中葉(井戸尻期)から中期後半の廃棄

中期中葉には廃絶堅穴凹地への廃棄が引き続き認められるが，多摩丘陵などでは真の「土器捨て場」とでも呼べるような廃絶堅穴に代わる遺構外の凹地への半完形土器の廃棄が見られるようになる（八王子市小田野遺跡，9b～9c期）[戸田 1996]。この時期は廃棄される土器の個体数も格段に多くなるようである。同様に中部高地の目切遺跡でも住居址に近接する遺構外の「遺物集中ブロック」から多量の半完形が出土しており，南関東と似たようなあり方を確認することができるのは注目される [会田他 2005]。中期を通して自然地形の凹地を廃棄場として利用しているのは当該期ぐらいであろう。

廃絶堅穴凹地への遺物廃棄は中期後半にピークを迎える。八王子市滑坂遺跡（10期）では2ないし3軒での破片の住居址間接合がみられる。その後も堅穴内への廃棄は残るが，加曽利E 1～2期（10期）が多量の半完形土器を廃棄する「吹上パターン」的廃棄の最終時期となる。次の段階では，武蔵野台地の諸遺跡では11c期には曾利式土器などとともにそれ以上の在地の連弧文土器を多量に廃棄する事例が多い。国分寺市多喜窪遺跡（第264次調査）SI366J住居址（11c期）では，廃絶堅穴より11c期の土器を主体とする半完形～大型破片土器50個体以上が出土しているが，1個体分の破片が潰れて遺存しているものもあるが，堅穴全体に破片が満遍なく散乱している個体もあり，破片の欠損部位も多くまさにゴミ捨て場そのものに見える。廃棄物の処理や投棄方法などに中期前半の廃棄の様相とはやや異なることがうかがえる [福田他 2003]。

先述したように中期後半には中期前半以上に埋甕など土器の再利用が促進された。しかも今の今まで使用していた個体を用いるだけでなく，既に廃棄されていた古い個体を回収して使用したような事例も知られている。

#### ⑤……………「吹上パターン」と呼称されてきた廃棄の土器組成について

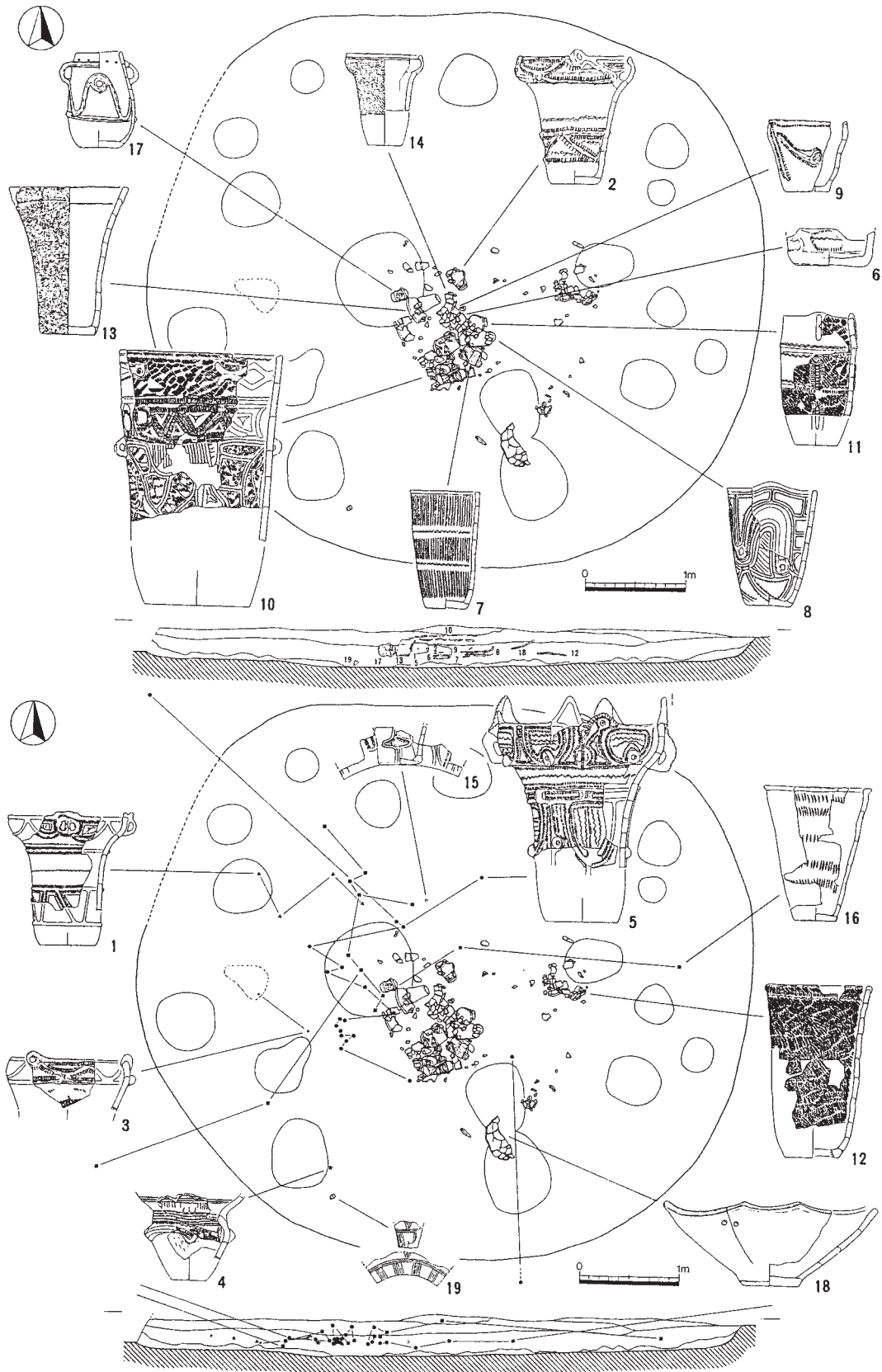
「吹上パターン」[小林 1965]の提唱後1960年代後半から1970年代にかけて注意が喚起され，1970年代には事例の検討も行われるようになった。山本暉久はこれを「住居跡内一括遺存現象」と呼称し，1978年の段階で関東・中部地域を中心として132遺跡280例を集成し検討した [山本

1978]。そして上屋等の解体後、集坵の埋め戻し（人為的堆積）により凹地が形成され、土器などの生活財を一括投棄したと理解した。このように住居の廃絶過程と土器の一括遺存について説明し、その性格について解釈を試みようとした。その後一次堆積土の形成要因については諸氏により人為か自然か大きな論議を呼んだ。1960年代に注意され1970年代以降の「吹上パターン」のような土器の出土状態への関心は、その後の住居の埋没過程に注意が払われるようになる契機となり、今日小林謙一が体系化した「ライフサイクル」論への理解などに繋がる[小林2000・2010]

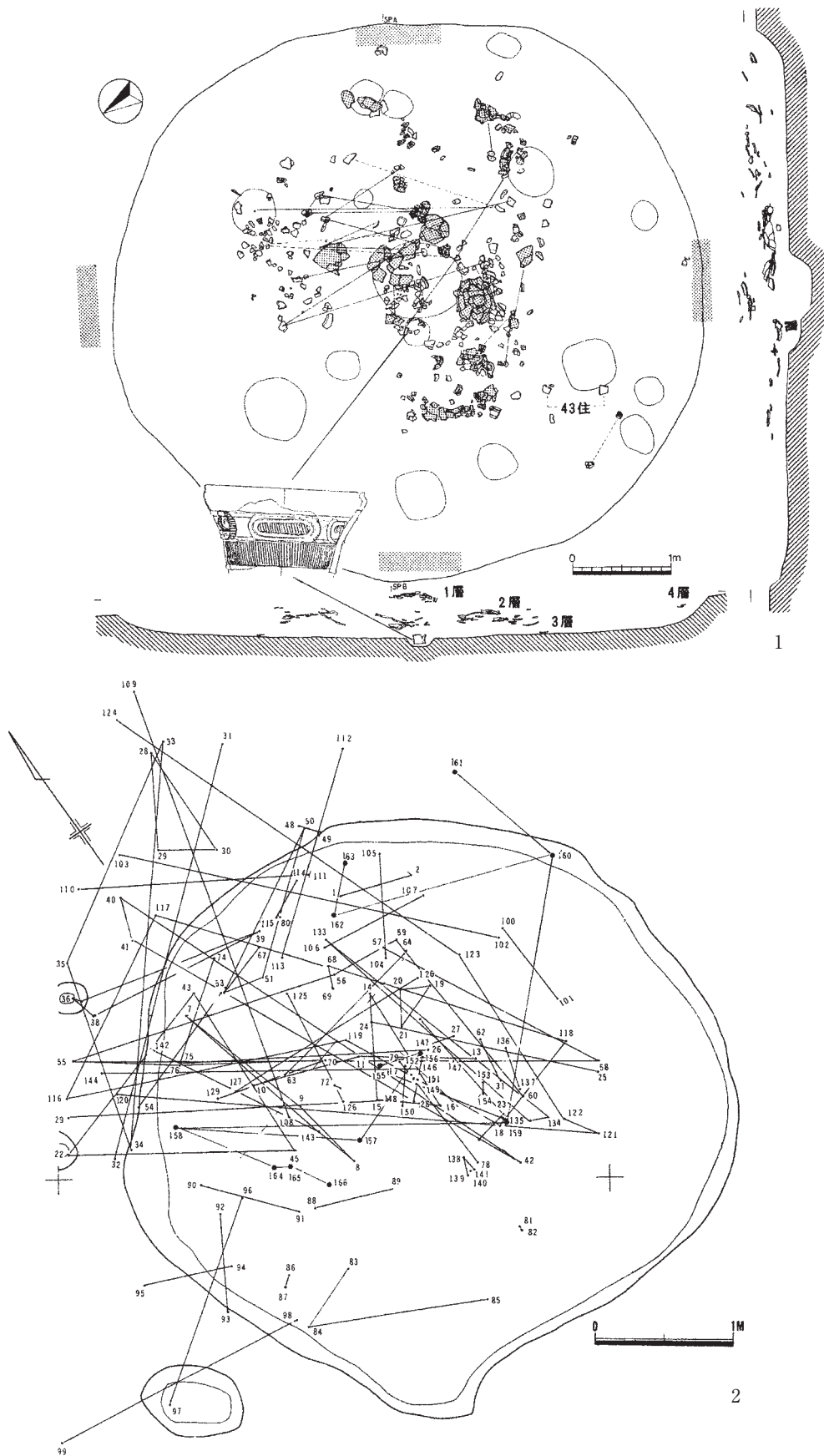
その後の調査例の増加で典型的な「吹上げパターン」と称されてきた土器の遺存状況は藤内Ⅰ期（7期）以降に顕著であることが明らかになってきた。次に中期前半の「吹上パターン」の具体的な事例についてみていきたい。

「吹上パターン」といわれてきた土器の遺存状況では、完全無欠な土器はなくいずれも破損している（整理作業に要した時間にもよるが底部を欠損する個体が目立つ）。調査の際に付近から破片が回収されたとしても無傷のものは皆無ということは注意される。状態としては第一次的な目的で製作された容器としての使用に耐えられない個体が廃棄されたといえよう。

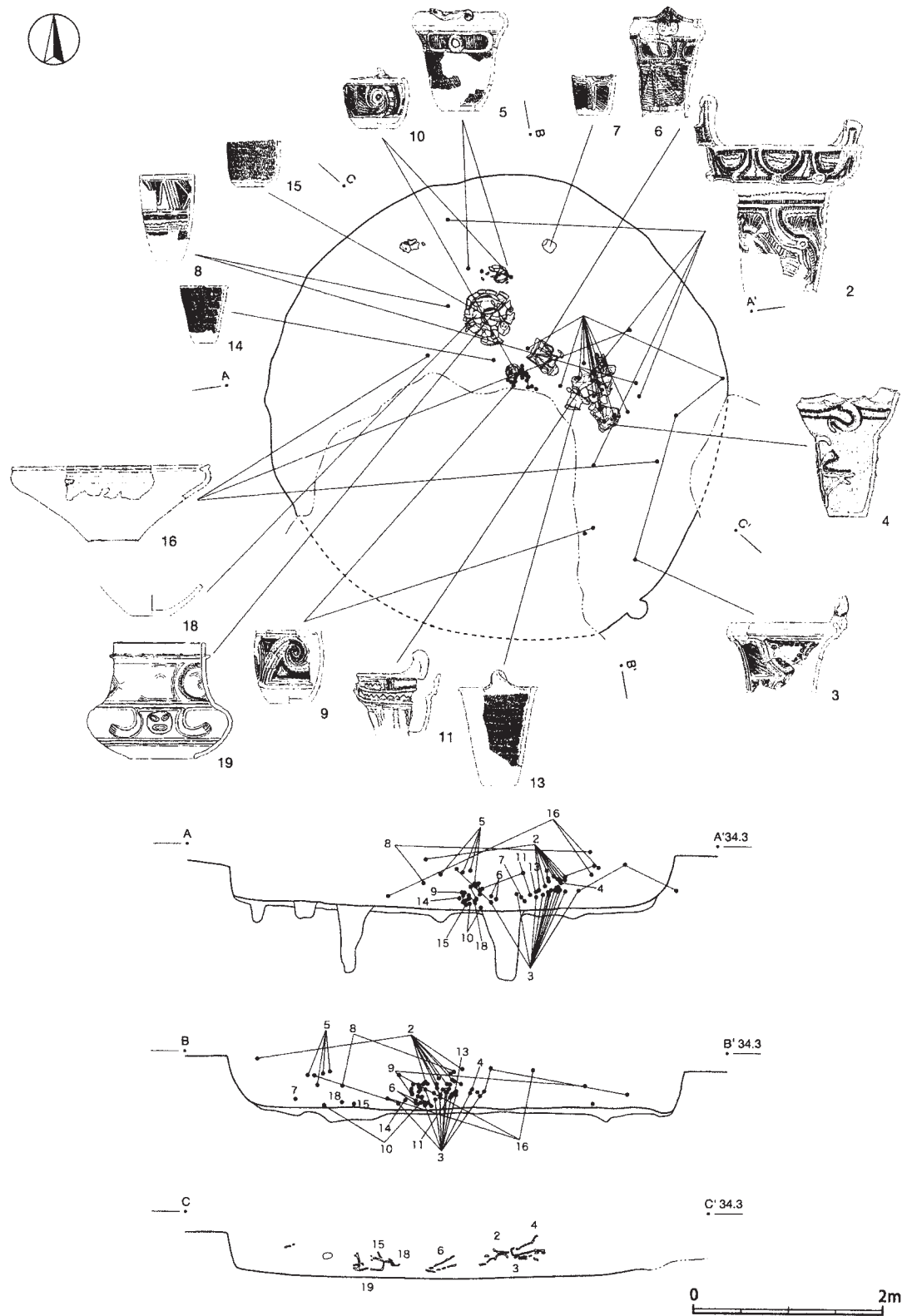
小金井市中山谷遺跡は野川流域の国分寺崖線の武蔵野段丘上に存在した典型的な縄文中期の「大規模集落」の一つで、未掘の部分が多いものの現在までに住居跡50軒以上が調査されているが、遺跡の広がりから推定しても優にその倍は遺存しているとみられる[伊藤他1987]。29号住居址は藤内Ⅰ古期（7a期）で、住居址中央の凹地付近に集中して18個体の半完形土器が出土している（第5図）。深鉢15個体、浅鉢（補修孔あり）1個体、有孔罎付土器1個体、小型土器1個体などと1200点もの破片が出土した。ここで注意されるのは無傷無欠の個体は1点もないこと、覆土には半完形土器以外にも大小の破片が多量に含まれていたことが挙げられる。土器のタイプ（器種）は1個体1個体が全て異なることから、あるいは一単位のセットとしてこの土器の一括性を保証しているかのように見える。全ての個体が同時に使用されていたという確証はないが、「吹上パターン」出土の土器はすべて同時に一括廃棄されたのではないかと想定したくなるような組み合わせをもった好例である。ただし集落全体を完掘した遺跡ではないので、前述したように住居址間で接合が行われていないため廃棄の方向性や分割廃棄が行われたかどうかなどは不明である。さらに中山谷遺跡の近隣の集落遺跡でも7～8期の土器が相似たようなタイプ（器種）、15～20点程の組み合わせをもって1軒の竪穴から出土している状況を知ることができる。例えば小金井市貫井南遺跡6号住居址（第8図2）、府中市清水が丘遺跡SI17号住居址（第8図3）では1点の炉体土器を含み、キャリパー形深鉢、円筒形深鉢、浅鉢、有孔罎付壺など、覆土中に共通する相似たような組み合わせをもった土器が遺存していたことが確認された。覆土にはいずれも完形個体のみではなく破片資料も多量に含むものであるが、偶然にしてはこれらの土器の組成の類似は不自然である。火災住居址をはじめ床面出土遺物を集成、検討した研究[桐生1989など]では、確かに中期の竪穴住居内で一時期に使用されていた土器の個体数は2～3個体と意外に少なかったということが導き出されていることも無視できない。しかしそれは、最終的に転出に際して生活財の大半を持ち出している可能性と、竪穴内では少数の土器が使用されていたとしても屋外での使用、保管も含めた土器の個体数については今のところ検証できない。中山谷遺跡29住居址他の事例でも当時の代表的なタイプ（器種）がバランスよく揃っているという事実はこの廃棄の一括性、同時性を示唆している蓋然性がないと



第5図 中山谷遺跡29号住居址の遺物出土状態



第6図 中山谷遺跡41号・2号住居址の遺物出土状態 (1. 41住, 2. 2住)



第7図 原山遺跡住居址 SI01 の遺物出土状態

いえないこともない。上記の事例などから中期前半では堅穴住居外での土器の使用・保管場所も含めて、一時期には15～20点程の各種の個体が同時使用されていたとみたい。また中期後半では土器のタイプ（器種）こそ減少するが同様のことが言えるのではなかろうか。

多摩市和田・百草遺跡住居址 SI3（8b期）では約40個体ほどの半完形土器が1軒の堅穴凹地に廃棄されているが、これは1か所に2軒分（2か所から）の土器がほぼ同時期に廃棄されたことを物語っているのではあろうか〔植田他1986〕。

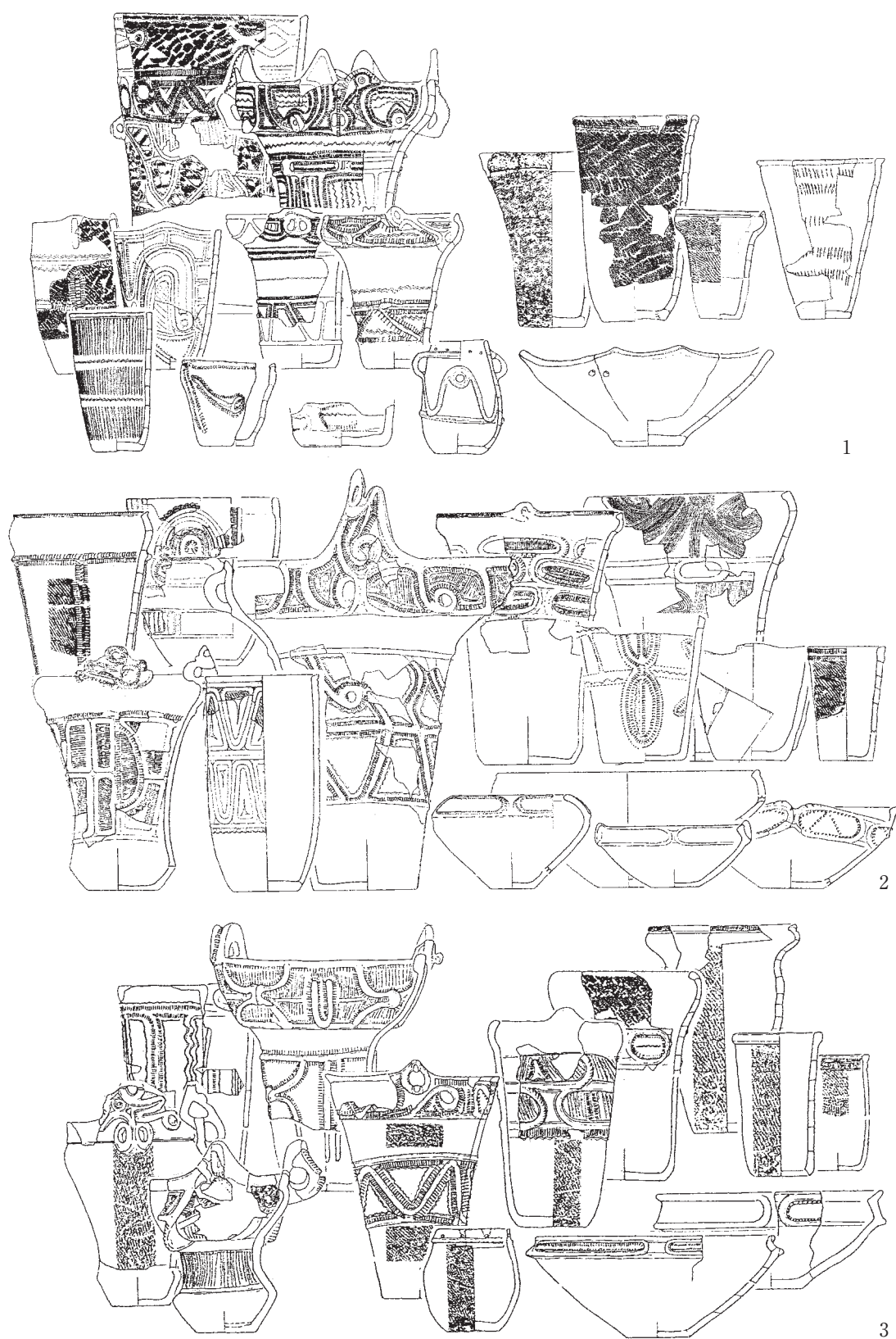
中山谷遺跡41号住居址（8b期）では炉にキャリパー形の深鉢が埋設され、廃絶堅穴の凹地中央を中心に深鉢、浅鉢形土器など30個体以上の半完形にならない大型破片が遺存していた。本住居址では柱穴直上には遺物が少なく、おそらくは柱の抜き取りがされないうちに土器が廃棄された状況が見てとれた。埋まりきらない炉を目がけて廃棄が行われたのであろうか（第6図1）。29号住居跡に比して土器の復元（完形）率が小さいのも特徴である。また時期も7b期～8b期とやや時間幅のある土器を含むので2次以上の「再廃棄」が行われたのであろう。

同遺跡2号住居址（9a期）では、接合状況より土器片が北から南東方向に投棄された状況がうかがえる〔岡崎他1975〕。このように同遺跡の同時期においても廃棄のあり方は多様であることも明らかである。

同じく野川流域に所在する調布市原山遺跡 SI01号住居址の廃絶堅穴では19個体もの半完形土器が廃棄されていたが、堅穴凹地中央のやや北寄りに有孔鏝付土器が正位に据え置かれ、内部に深鉢形土器の胴下半部、口縁方には浅鉢で蓋をするように逆位に被せられたような状態で、その周囲には半完形土器13点が廃棄されていた〔調布市教育委員会2005〕。

以上のような状況は廃絶堅穴で行われた儀礼行為の所産なのか否か詳細は不明であるが、廃絶堅穴＝ゴミ捨て場で、中には土器が単なるゴミ（廃棄物）として廃棄されていただけではないという事例もみられるのも無視できない。ただし注意しなければいけないのは、大多数の廃絶堅穴では、一部の目立つ半完形個体以上に破損した破片の個体数が膨大な点数になることから、黒尾の指摘するように、あくまで廃絶堅穴は当初は土器片や石器、礫なども含んだ日常生活で生じる残滓を廃棄するスペースとして設定、利用されていたことは間違いない〔黒尾1988など〕。また廃絶→埋没過程にある堅穴では、不要な廃棄物が廃棄されていただけでなく、その凹地を利用して集石土坑が構築されたり他の行為が重複する事例も個々に想定されるので、事実上廃棄形態のパターン化は不可能である。

研究史上いわゆる「吹上パターン」とされた遺物出土状況では、廃絶堅穴を利用した凹地に日常的な生活廃棄物が投棄されつつも、動機は不明といわざるを得ないが、ある時にはある程度まとまった「一括土器」が廃棄されることもあり、異なった廃棄の仕方の複合・累積であったことは明らかである。廃絶堅穴への廃棄、そのベースは一般的な生活廃棄物の累積で構成されているにも関わらず、「吹上パターン」を全て、一定の特殊な行為や状況と見なそうという説は依然として根強いように見受けられる。



第8図 中期前半住居址出土土器の組成 (1. 中山谷遺跡 29号住, 2. 貫井南遺跡 6号住, 3. 清水が丘遺跡 17号住)



## ⑥……………まとめ

東京多摩地域など南関東の縄文時代中期初頭の集落では台地の外縁の斜面に廃棄場所が設けられた。台地中央の居住空間を挟んで対峙するように2か所に設定されることが普通であった。これがその後の時期に踏襲され発展すれば2か所の廃棄場所がやがて弧状に繋がり、その廃棄物の集積された形状はまさに馬蹄形貝塚のごとくなるであろう。

次の縄文時代中期前半の集落では、居住する住居に近接する廃絶堅穴より、むしろ空地＝「広場」を挟んで数十メートル離れた廃絶堅穴に廃棄場所を設けるという特徴がうかがえた。また土器は1個体が1か所に廃棄されることもあれば、意図的に小破片に分割され2か所以上複数の場所に廃棄されることも行われたことなど多様なあり方が見える。中期前半の初期においては居住場所から想像以上に離れた場所に廃棄場所を設定する特徴が指摘できる。中期前半の廃絶堅穴への廃棄は中期初頭以来の遺構外の斜面廃棄に端を発していることは明らかである。一度居住された堅穴は廃絶後、少し距離をおいて反対方向に構築された住居の住人によりやがて廃棄場として利用された。

さらに中期後半の集落遺跡では一般的に住居の構築が次第に内進化していく状況が見てとれる。中期前半とは異なり、中期後半では比較的居住場所から至近の場所にある廃絶堅穴に廃棄が行われていたことが明らかであり[黒尾1993など]、住居跡の内進性を促進させることと関連があるとみられる。このような行為が断続的に反復されることにより少しずつ左右にもずれながら狭まり、次第に住居址の分布形状が環状あるいは馬蹄形になるものと考えられる。最後に外縁から内側に向かって住居が多数構築されると、廃棄物(ゴミ)の処理が限界となり飽和状態に至るのであろうか、多くの集落遺跡の調査で確認できるように集落が放棄され移動を余儀なくされる。

住居址単位で廃棄される土器の遺存状態の視点からみると、中期前半の藤内I期(7期)～中期後半の加曾利E期(10期)までが住居1軒分のセットを成すような半完形個体が廃絶堅穴から纏まって出土する傾向がみられ、いわゆる一括廃棄(同時廃棄)が行われた可能性も指摘できるが、その他の遺存する膨大な土器片や石器、礫などの出土から、廃絶堅穴の凹地は居住に伴って日常的な廃棄場として好まれ機能し続けていたことは間違いないといえよう。

「環状集落」の形成要因については、集落が切り開かれて居住が開始された当初の住人により、後世を見越すように計画性をもって住居が環状に配置されたという想定はとうてい容認できないであろう。また多くの縄文中期集落では廃棄場所が2か所に分かれたり、残された住居址などが大きく2ブロックに分かれて見えることがあり、これは集落に「分節構造」があるといわれる所以であるが[谷口2005など]、度重なる廃棄場所の転移により必然的に生じたものであろう。これは「双分制」など1つの集落に2つの異なる出自集団が同時共存したという想定の本拠とされる。このことに対しては、同一集団内で結果的に2つのブロックを形成したとする想定も可能なので、出自の異なる2つの集団の共存はあくまで想像の域を脱しないであろう。

---

## おわりに

かつて東京多摩地域は、発掘調査で堅穴を中心とした遺物の出土状態を記録するという点では先進地域であった。1970年代後半以降発掘調査の際記録されてきた遺物分布図、接合図の記録、提示であるが、現在の調査では後退している感がある。とくに接合図から読み取れる情報に対しては、その作成に要する労力に対して十分な成果が上がらないこともあって、既に限界—絶望的とみなされてしまったのであろうか。

土器片の接合は、そこにその集落遺跡内の人の動きの一端を垣間見ることができるという意味では貴重な情報源の一つである。「新地平シンポジウム1」（1995年）以降再三主張してきているように、遺物分布図作成→接合作業と接合資料の検討が進んだ結果、同時存在と目されていた遺構の共存、同時性を否定する事例の多いことが確認できるようになった。土器型式上「同時期」と信じられ一つに括られてきた住居跡が、1本の接合線によりことごとく時間差（ズレ）をもって構築された所産であることがようやく周知されてきたのではなかろうか。たとえ1片の土器の動きでも重要な情報を内包しているといえるのである。

遺構の時間的な復元を究極に推進すれば、結局は個々の住居の継起—構築から居住開始時期、構築から廃絶までの「ライフサイクル」の時間的長さは、現実には一軒一軒全て異なるので同時存在（同時期並行）の住居は限りなく少なくなる。これは至極当然のことであり個別の集落史についてより詳述することが可能となるのである。

住居址が100軒を超えて残されたような「大規模集落」では、情報量が豊富な半面、後代の集団による「攪乱」など2次的変容を受けやすく、古い時期の人々の痕跡を復元することがより困難となる。ゆえに単（短）期の居住痕跡である「小規模集落」での分析・検討が非常に有効であるのは間違いない。集落遺跡の調査では住居址などの遺構の時間的な関係の整理、復元が必要なのはいうまでもない。

なお、今日はこれまでの発掘調査で報告され蓄積されてきた膨大な情報の見直し、洗い出しも意義があるのではなかろうか。調査記録の精度も様々ではあろうが、報告書が既に刊行されている場合でも、報告段階では十分ではなかった記載、記録資料を再検討することによって再び資料的価値が付加される遺跡も相当数あるにちがいない。更なる資料の再整理に期待したい。

今後も具体的事例に即して縄文時代集落の実態について考察していきたい。

## 註

(1)——本論中で示した( )内の細別時期は「新地平編年」によるもので、以下の表のように対比される。

|        | 型 式     | 時 期  |
|--------|---------|------|
| 初<br>頭 | 五領ヶ台 1  | 1    |
|        |         | 2    |
|        | 五領ヶ台 2  | 3    |
|        |         | 4    |
| 前<br>半 | 勝坂 1    | 5a   |
|        |         | 5b   |
|        |         | 5c   |
|        |         | 6a   |
|        |         | 6b   |
|        |         | 7a   |
|        | 勝坂 2    | 7b   |
|        |         | 8a   |
|        |         | 8b   |
|        |         | 9a   |
|        | 勝坂 3    | 9b   |
|        |         | 9c   |
| 10a    |         |      |
| 後<br>半 | 加曾利 E 1 | 10b  |
|        |         | 10c  |
|        |         | 11a  |
|        | 加曾利 E 2 | 11b  |
|        |         | 11C1 |
|        |         | 11C2 |
|        |         | 12a  |
|        | 加曾利 E 3 | 12b  |
|        |         | 12c  |
|        |         | 13a  |
|        | 加曾利 E 4 | 13b  |

## 参考文献

- 小林達雄他 1965『米島貝塚』埼玉県庄和町教育委員会  
 安孫子昭二他 1975『貫井南 小金井市貫井南遺跡調査報告』貫井南遺跡調査会  
 土井義夫他 1975『小金井市文化財調査報告書 4 栗山』小金井市教育委員会  
 岡崎完樹他 1975『中山谷遺跡』中山谷遺跡調査会  
 山本暉久 1978「縄文中期における住居址内一括土器遺存土器群の性格」『神奈川考古』第 3 号 神奈川考古同人会  
 橋口尚武他 1980『武蔵村山市吉祥山遺跡第 3 次調査詳報』武蔵村山市教育委員会  
 中西充他 1981『柵田遺跡群 1978 年度調査概報』柵田遺跡調査会  
 広瀬昭弘他 1982『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ』恋ヶ窪遺跡調査会  
 藤野修一他 1982『神谷原Ⅱ』柵田遺跡調査会  
 中野修秀 1984「土器捨て場考(1) —特に縄文時代中・後期の関東及び中部高地を中心として—」日本考古学研究所集報 VI  
 中野良一他 1985『清水が丘遺跡 府中都市計画道路 2・1・4 号線建設に伴う事前調査』府中市遺跡調査会  
 植田真他 1986『多摩市文化財調査報告 10 和田・百草遺跡群』多摩市教育委員会  
 伊藤富治他 1987『中山谷遺跡—第 9 次～11 次調査(1981～1983)—』小金井市遺跡調査会  
 桐生直彦 1987「竪穴住居址を中心とした遺物分布状態の分類について」『東国史論』第 2 号 群馬考古学研究会  
 黒尾和久 1987「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』No. 454 校倉書房  
 黒尾和久 1987「竪穴住居出土遺物の一般的なあり方について—「吹上パターン」の一資料的検討を中心に—」『古代集

---

落の諸問題】

- 佐々木克典他 1988 『南八王子地区遺跡調査報告 4 滑坂遺跡』 南八王子地区遺跡調査会  
桐生直彦 1989 a 「住居址間土器接合資料の捉え方」『土曜考古』第13号土曜考古学研究会  
桐生直彦 1989 b 「床面」出土遺物の検討（I）『物質文化』第52号  
下原裕司他 1992 『御殿山遺跡第2地区C地点—（仮）吉祥寺ビル—建設に伴う発掘調査』 武蔵野市教育委員会・御殿山遺跡調査会  
小葉一夫他 1993 「No. 471 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 平成3年度（第3分冊）』 東京都埋蔵文化財センター  
小葉一夫他 1994 『黒川地区遺跡群報告書Ⅵ』 住宅・都市整備公団・黒川地区遺跡調査団  
黒尾和久他 1993 『はらやま—都営調布柴崎一丁目第2住宅建て替えに伴う発掘調査—』 調布市原山遺跡調査会  
黒尾和久・小葉一夫・小林謙一・中山真治 1995 『シンポジウム縄文中期集落の新地平』 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会  
伊藤富治他 1996 『東京都小金井市栗山遺跡 B 2 地点』 小金井市遺跡調査会  
戸田哲也他 1996 『東京都八王子市小田野遺跡発掘調査報告書』 小田野遺跡発掘調査団  
下原裕司他 1997 『鳥屋敷遺跡 I 第1分冊 旧石器・縄文時代編』 三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会  
平塚市博物館市史編さん担当 1999 『平塚市史 11 上 別編考古（1）』 平塚市  
小林謙一 2000 「堅穴住居重複関係の研究」『異貌』第18号 共同体研究会  
福田信夫他 2003 『武蔵国分寺跡発掘調査概報（多喜窪遺跡の調査）』 国分寺市遺跡調査会  
土井義夫・黒尾和久 2004 「対談 多摩の縄文中期のムラを掘る」『多摩のあゆみ』第116号 たましん地域文化財団  
宇佐美哲也 2004 「堅穴住居出土遺物の一般的なあり方」『多摩のあゆみ』第116号 たましん地域文化財団  
谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』 学生社  
宮下孝優他 2005 『東京都練馬区中村南遺跡 第2地点』 練馬区教育委員会・共和開発株式会社  
調布市教育委員会 2005 『調布市の遺跡調査 第6集』 調布市埋蔵文化財調査報告 76  
会田進他 2005 『目切・清水田遺跡』 岡谷市教育委員会  
中山真治 2007 「縄文時代中期の小規模集落—矢川・野川上流域の中期初頭・前半集落を例に—」『セツルメント研究』第6号 セツルメント研究会  
小林謙一 2010 「日本縄文時代集落遺跡における堅穴住居跡調査研究史と課題」『聚落研究 1』

（府中市文化スポーツ部文化振興課，国立歴史民族博物館共同研究員）

（2010年9月27日受付，2011年5月20日審査終了）

---

## **Colonies and Disposal in the Middle Jomon Period : Mainly in the First Half to the Second Half of the Middle Jomon Period in South Kanto**

NAKAYAMA Shinji

In the abandoned house-pits of the middle Jomon period in South Kanto, a large number of remains including earthenwares were disposed of. The house-pits were often effectively used as waste disposal places for residue generated in daily life. Concerning the disposal in the middle Jomon period, the characteristics and transition of the disposal of remains according to the time which can be observed from the joints of the earthenwares mainly from the sites of the middle period in the Tama region, Tokyo were grasped.

At the beginning of the middle period, earthenwares were thrown away mainly on slopes, and two opposing disposal places were set on both sides of vacant land, “open field”, at the center of a colony. After the first half of the middle period, as the construction of house-pits increased, the disposal into the concave parts of the abandoned house-pits increased. In the first half of the middle period, earthenwares were sometimes intentionally thrown into the abandoned house-pits on the opposite side of the dwelling and across the “open field” at the center of the colony. At that time, single earthenware was sometimes intentionally divided into pieces and thrown away. In the middle stage of the middle period, colonies which had disposal places, so-called “earthenware disposal sites”, at the outside of the construction appeared. From the middle stage to the second half of the middle period, earthenwares were often thrown into the concave parts of the abandoned house-pits which are located at a place relatively close to living places. This is considered to be associated with the use of earthenwares for furnace body, buried pots, etc.

Concerning the so-called “Fukiage pattern”, which is the state of gathering of semi-finished earthenwares, especially in the first half of the middle period, 15 to 20 pieces of similar earthenware types (implement types) were found in every house-pit. This is considered to verify the en bloc handling of earthenware as one unit at that time (disposal at the same time). However, the individual items left in the abandoned house-pits contain not only semi-finished earthenwares but a lot of broken pieces, stone implements, gravel, etc. Therefore, it is presumed that the house-pits originally functioned as daily disposal places.

Key words: disposal, abandoned house-pit, joint, Fukiage pattern

---